敦煌禪宗文獻分類目録

―Ⅲ 注抄・僞經論類(2)―

田中良昭
程　　正

9、禪門經

① S5532　② P4646　③ BD3495（露 95、北 8224）　④ BD7333（鳥 33、北 8225）　⑤ BD9649（湯 070）　⑥ BD12226（L2355）　⑦浙敦 188（浙博 163）

〔テキストの飜刻・校訂〕

③許國霖「佛説禪門經」（同氏『敦煌石室寫經題記與敦煌雜録』上輯 , 上海 , 上海商務印書館, 1937, 10 右 -10 左）（序文のみ）

①柳田聖山「禪門經について」（『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』1961）→〈柳田〉1（p.302, pp.308-311）

①鈴木大拙「第二篇研究文獻」（『禪思想史研究第三』〈大拙〉3, 1968, pp.331-335）

①②③④猪崎直道「『禪門經』考」（『駒大大學院年報』31, 1998, pp.38-51）

⑥『北京敦煌』110（pp.095-096）

⑦黄征・張崇依「浙敦 188（浙博 163『佛説禪門經』校釋」（黄征・張崇依『浙藏敦煌文獻校録整理』下〈語言科技文庫・古代漢語學研究系列〉上海, 上海古籍出版社, 2012, pp.599-600）

〔著書・論文〕

矢吹慶輝「二八　禪門經並序」（『鳴沙餘韻解説』pp.289-293）

柳田聖山「禪門經について」（『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』1961, pp. 869-882）→〈柳田〉1（pp.301-314）

岡部和雄「『禪門經』」（『敦煌佛典と禪』pp.365-368）

沖本克己「MENSURA ZOILI―禪文獻の計量語彙論的研究の試み」（『禪文研紀要』19, 1993, pp.077-096）

猪崎直道「『禪門經』考」（『駒大大學院年報』31, 1998, pp.33-51）
猪崎直道「僞經『禪門經』とその思想について」（『印佛研』47-2, 1999, pp. 67-69）
千田たくま「僞經『禪門經』の研究」（『禪學研究』83, 2005, pp.71-90）
曹凌「268 禪門經」（同氏『中國佛教疑僞經綜録』上海, 上海古籍出版社, 2011, pp.474-478）

〔略記〕

本書は、初期禪宗に大きな思想的影響を及ぼしたいわゆる禪宗系の僞經の 1 種であるが、宋代以降、敦煌文獻が再び發見されるまでの長い間、その存在がまったく忘れ去れていたものである。

最初に敦煌文獻中に本書を發見されたのが矢吹慶輝氏である。すなわち矢吹氏は、本書の全文紹介はしなかったものの、その著『鳴沙餘韻解説』において、スタイン本の舊番號 590 すなわち①を本書のテキストとして紹介し、失譯の『禪要經』「呵欲品第一」や鳩摩羅什譯の『禪法要解』などとの類似性を論じた上で、本書に附された序文の著者である慧光と同名の人物に齊の慧光、『大乘北宗論』の撰者、『大乘開心顯解脱論』すなわち『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の著者などがいることや本書が智昇の『開元録』に著録されていること、序文に登場した「寂和尚」が恐らく北宗神秀の弟子である普寂禪師であることなど、先見性に富んだ示唆をされたのである。

ついでこうした矢吹氏の研究成果を踏まえて、本書の研究に本格的に取り組まれたのが、柳田聖山氏の「禪門經について」（『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』1961）と題する論文である。すなわち柳田氏は、本書のテキストとして新たに陳垣氏の『敦煌劫餘録』と、許國霖氏の『敦煌石室寫經題記與敦煌雜録』上輯の記載によってその存在が知られた北京本の③と④を附記で紹介し、當時唯一その全貌が知られていた①を底本に、本書を引用した敦煌禪宗文獻の『諸經要抄』、『歷代法寶記』や、傳世資料として知られた大珠慧海の『頓悟要門』、永明延壽の『宗鏡録』などの關連部分の内容と校合してテキストの校正を試みたのである。さらに、智昇の『開元録』にあった「承前諸録皆未曽載、今開元新録搜集編上」という記述を手がかりに、本書の成立を『大周録』（691）から『開元録』（730）の間と推定した上で、『諸經要抄』、『歷代法寶記』にも引用されたことに注目し、「曽て資州系の何人（なんぴと）かが私かに僞作し、以後、蜀の地方に

のみ行われたのではなかろうか」と推測された。さらに「恐らく開元初年に出現した『禪門經』を、最も重視したのは無住であり、或はその弟子である『歴代法寶記』の作者である」と指摘しつつ、本書と初期禪宗の思想的關連にも關説されたのである。

その後、岡部和雄氏が「『禪門經』」（『敦煌佛典と禪』）という章節において、本書に關する從來の研究成果を回顧しつつ、それまで發見されたテキストの①②③④については、次のように紹介された。すなわち、「北京本（③④）については、『敦煌劫餘録』によって、前者（③）が六紙一五六行で、後者（④）が三紙四四行のいずれも殘卷である」、「ペリオ本（②）は貝葉式梵筴本で『維摩經』『文殊説般若經』『頓悟大乘正理決』『觀心論』『禪門經』の順で連寫されている。スタイン本（S 五五三二）も『觀心論』『禪門經』の連寫であり、貝葉式梵筴本という寫本の形式まで共通している。」（括弧の〇數字は、筆者がつけたもの）という。

ただ、今回の目録を作成するに際して、筆者が新たに精査したところ、③は『北京敦煌』48 册に、④は『北京敦煌』96 册にそれぞれ收録されていることが判明した。それぞれの卷末に附された「條記目録」によって、兩者のテキストに關するより精確な書誌學的情報が明らかになったのである。すなわち、③は（23.5＋263）× 24.6cm の 6 紙からなる首缺の寫卷で、1 行凡そ 16 ～ 17 字で 156 行が書寫されており、「慧光序」の「嵩山禮拜寂 ･･･」から「佛説禪門經一卷」の尾題までの内容を含んでいる。一方、④は 87×28cm の 3 紙からなる首尾ともに缺く殘卷で、1 行凡そ 23～25 字で 44 行が書寫されており、「棄諸蓋菩薩白佛言世尊如餘經中惑（ママ）説四禪十二觀門 ･･･」から「棄諸蓋菩薩白佛言世尊我等蒙佛慈悲接引曠劫迷 ･･･」までで以下斷缺している。

ところで、猪崎直道氏が「『禪門經』考」（『駒大大學院年報』31, 1998）と題する論文を發表された。その中で猪崎氏は、①を底本に、②③④の 3 種を校本にして、當時では最も元のものに近いと思われる本書のテキストの作成を試みた上で、その訓讀もされている。

近年の研究成果として、千田たくま氏が發表された「僞經『禪門經』の研究」（『禪學研究』83, 2005）と題する論文がある。千田氏は、「『禪門經』を禪觀説の一つと捉え、『禪門經』の成立時期である七世紀まつから八世紀始めの佛教教理と絡めながら、『禪門經』の思想的背景とその内容について考察する」として、本書の全體の構成を概觀し、その由來と傾向を檢討した上で、そ

の内容を紹介された。その結論として千田氏は次のように指摘されている。すなわち、本書は「『法華經』や天台それに禪觀思想を背景にしながら、『涅槃經』などの如來藏佛性的立場から、修行者の性分を問わずに、すべての修行者を今生即今に究竟位に至ると見なすもので、その意味で頓悟を主張した經典である。そして即身成佛の頓悟は、禪定によって佛位に入るもので、入定状態の限りにおいて、修行者菩薩は空性を顯わして無漏智であると意識されており、いわば天台の戒定慧三學圓融觀と同じ立場にたつ」という。ただ千田氏は、本書のテキストとして浙江省博物館所藏の⑦の存在に言及した上で、從來知られていた①②③④と合わせて、③を最良本として底本とし、他の 4 種を校本にして本書のテキスト校訂を行い、別に發表したいというが、それはいまだに發表されていないようである。

ところで、千田氏が言及した本書のテキスト⑦については、その影印が 2000 年 7 月に浙江教育出版社より刊行された『浙藏敦煌』にあり、またそのテキスト校訂を試みられたのが、黄征・張崇依の兩氏による「浙敦 188（浙博 163）『佛説禪門經』校釋」（黄征・張崇依『浙藏敦煌文獻校録整理』下〈語言科技文庫・古代漢語學研究系列〉上海 , 上海古籍出版社, 2012）である。兩氏の紹介によれば、⑦は高さ 25cm ×長さ 23.2cm の 1 紙からなる首缺の殘卷で、1 行約 20～22 字で 11 行の内容が殘されており、「佛説禪門經一卷」の尾題を有しているという。

一方、本書のテキストとして、現在も刊行中のシリーズ『北京敦煌』第 106 册に⑤、第 110 册に⑥の存することが知られるにいたった。それぞれの卷末に附された「條記目録」によれば、⑤は 29.9cm×28.7cm の 1 紙の殘卷で、1 行凡そ 24 字で 17 行の内容が殘されているのに對し、⑥は（7.7＋12.5＋3.5）×28cm の 2 紙からなる殘卷で、1 行凡そ 23 字で 13 行の内容が殘されているという。しかもこの兩者は、8 ～ 9 世紀頃の吐蕃支配期の寫本で、⑥→⑤の順で銜接することが可能であるという。すなわち、⑤⑥の 2 種はもともと同一寫本の一部分なのである。なお⑥に殘された本文は、「法忍當得阿耨多羅三藐三菩提 ･･･」から「･･･ 者四大無主虚幻不實」までであり、⑤に殘された本文は「六根體相從何而生 ･･･」から「･･･ 求佛聖智要」までであるという。

10、禪門經序（擬）

①Д x 6005

〔テキストの飜刻・校定〕

①程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83, 2005, pp.38-39）

〔著書・論文〕

程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83, 2005, pp.17-45）

〔略記〕

本書は、『俄藏敦煌』中から發見されたもので、わずかな斷片でありながら、從來知られていた『禪門經』諸本のいずれにも見られない内容を有しており、『禪門經』に對する研究においては無視できないものである。

本書のテキスト①の存在は、程正氏が發表した「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83, 2005）と題する論文によって初めて紹介されたものである。程氏の紹介によれば、①は「縱が長く、横の細い長方形の紙にわずか五行の文字が書寫されている。しかも紙の右下が缺けていたため、最後の二行の文字のみが無傷である。その無傷の二行で比定すると、もとの状態では、一行に約一九字前後で書寫されていることが推定できる。しかしながら、元來この文獻がどれほどの長さのものなのかについては、目下知り得ない」という。さらに、程氏の録文で知られるように、本書はわずか5行ほどの内容しか殘されていないにもかかわらず、「第三行には、『佛説禪門經』が、第五行には、「禪門」と「經」がそれぞれ解説を加えて、記されている」ということからして、程氏は『禪門經』「慧光序」の存在を知りながら、敢えて本書に「禪門經序」の擬題をつけたという。

11、佛説法句經

① S33　② S837　③ S2021　④ S3968　⑤ S4106　⑥ S4666　⑦ S7614　⑧ P2308　⑨ P3922　⑩ P3924　⑪ BD2580（歳 80、北 8665）　⑫ BD3123（騰 23、北 8664）　⑬ BD3417（露 17、北 8301）　⑭ BD3421（露 21、北 8668）　⑮ BD3424（露 24、北 8669）　⑯ BD3645（爲 45、北 8666）　⑰ BD3646（爲 46、北 8667）　⑱北大 D103　⑲津圖 67

⑳臺灣國立中央圖書館本 119 丙　㉑書道博物館本 90（中村不折氏舊藏本）
㉒杏雨書屋本 285（李氏鑒氏舊藏本 447）　㉓出口氏舊藏吐魯番文書 234

〔テキストの飜刻・校訂〕
③㉑『大正藏』（1432b-1435c）―㊦
㉓藤枝晃編『トルファン出土佛典の研究―高昌殘影釋録』（法藏館, 2005, pp. 135-136）

〔和譯〕
㊦宇井伯壽「佛説法句經竝びに疏」（同氏『西域佛典の研究―敦煌逸書簡譯』岩波書店, 1969, pp.339-353）

〔著書・論文〕
矢吹慶輝「一四　法句經」（『鳴沙餘韻解説』pp.237-244）
水野弘元「僞作の法句經について」（『駒大佛教紀要』19, 1961, pp.11-33）
宇井伯壽「佛説法句經竝びに疏」（同氏『西域佛典の研究―敦煌逸書簡譯』岩波書店, 1969, pp.333-390）
田中良昭「僞作の法句經と疏の異本について」（『印佛研』23-1, 1974, pp.122-129）→『田中敦煌』（pp.401-412）
岡部和雄「僞作『法句經』研究の現段階」（古田紹欽博士古稀記念會編『佛教の歴史的展開に見る諸形態 古田紹欽博士古稀記念論集』, 創文社, 1981, pp. 296-312）
岡部和雄「『法句經』」（『敦煌佛典と禪』pp.355-360）
木村清孝「僞經「佛説法句經」再考」（『佛教學』25, 1988, pp.1-20）→同氏『東アジア佛教思想の基礎構造』（春秋社, 2001, pp.237-257）
沖本克己「MENSURA ZOILI―禪文獻の計量語彙論的研究の試み」（『禪文研紀要』19, 1993, pp.077-096）
伊吹敦「『法句經』の成立と變化について」（『佛教學』44, 2002, p1-27）
伊吹敦「『法句經』の諸本について」（田中良昭博士古稀記念論集刊行會編『禪學研究の諸相 田中良昭博士古稀記念論集』大東出版社, 2003, pp.85-112）
伊吹敦「『法句經』の思想と歴史的意義」（『東洋學論叢』57, 2004, pp.1-65）
藤枝晃「二三四　法句經」（同氏編『トルファン出土佛典の研究―高昌殘影

釋録』（法藏館, 2005, p.159）

曹凌「150 法句經」（同氏『中國佛教疑僞經綜録』上海古籍出版社, 2011, pp. 287-300）

〔略記〕

本書は、三國時代に呉の維祇難等が譯出した 2 巻本『法句經』と同名であるが、内容が全く異なる僞作のもので、7 世紀から 10 世紀にかけて成立した禪宗文獻をはじめ、多くの佛教文獻に廣く引用されたにもかかわらず、敦煌文獻から再發見されるまでの長い間、その全貌が全く知られなかったものである。

敦煌文獻より最初に本書とその注釋書である『法句經疏』を發見したのが矢吹慶輝氏である。すなわち、矢吹氏は本書のテキストである中村不折氏舊藏本㉑とスタイン本の③を用いてテキストの校合を行い、その成果を大正藏 85 巻の古逸部に收める一方、その解題を「一四　法句經」と題して『鳴沙餘韻解説』に收めたのである。この解題において矢吹氏は、本書に「法句經」という題名が用いられた原因について、この經は「華嚴」「涅槃」などの大乘諸經から譬説法句を集めたもので、その作者にはこれをもって大乘經中の『法句經』に擬せんとする意圖があったのではないかと推測されたのである。なお、本書のテキストとして③㉑の 2 種のほかにも、S36、S83、P2381、⑬の北京本露 17 などの 4 種を擧げられた。ただ、この 4 種については、後述する田中良昭氏が「僞作の法句經と疏の異本について」（『印佛研』23-1、1974 →『田中敦煌』）と題する論文において、S36 は實際は④の S3968、S83 は實際は⑤の S4106 であり、P2381 は本書ではなく、眞正の『法句經』であると比定したことから、矢吹氏によって紹介された本書のテキストは、③④⑤⑬㉑の計 5 種になるのである。

ところで、本書とその注釋書である『法句經疏』の兩者についての詳細な論究は、水野弘元氏の「僞作の法句經について」（駒大佛教紀要 19、1961）と題する論文がその嚆矢となる。すなわち、この論文において水野氏は、僞作經論を中國佛教における特有の課題として説き起こし、本書の内容を紹介しつつ本書が僞作であることを論證した上で、本書を引用した佛教文獻では禪宗系のものが多いと指摘し、その實例として橋本凝胤舊藏本『達摩禪師論』、『大乘五方便北宗』、大谷大學藏敦煌本『諸經要抄』、北宗の燈史である『楞伽師資記』、淨衆・保唐宗の燈史に當たる『曆代法寶記』、大珠慧海の『頓悟入道要門論』、僧肇に假託された『寶藏論』、圭峰宗密の『禪源諸詮集都序』、永明延壽の『宗

鏡録』、『萬善同歸集』などの該當部分を擧げながら檢證した結果、本書の作者については不明であり、その成立については650年をそれほど遡らないとし、『法句經疏』については玄奘譯以前もしくは玄奘譯が一般に依用される以前（恐らく7世紀中頃までの間）に、攝論宗に關係のある人が著したもの、とそれぞれ推定されたのである。

一方、中村元氏等の盡力で、1969年に宇井伯壽氏の遺稿となる『西域佛典の研究―敦煌逸書簡譯』が岩波書店より刊行された。これには「佛説法句經竝びに疏」と題する章節があり、本書及び『法句經疏』の解説と大正藏本による國譯を收録している。この解説において宇井氏は、本書および『法句經疏』について「全體は禪宗的の色彩が濃いやうに思はれる。然し、疏は却って禪宗的ではなくして、一般の教家の注釋の仕方で注釋せられ、禪宗的表現はあまりない如くである」と指摘されたのである。さらに宇井氏は、本書を引用した佛教文獻として、敦煌本慧觀撰『藥師經疏』、大珠慧海の『頓悟要門』、圭峰宗密の『禪源諸詮集都序』、敦煌本『維摩經疏』、大谷大學藏敦煌本『諸經要抄』、僧肇に假託された『寶藏論』、北宗の燈史である『楞伽師資記』などを擧げられたのである。特に敦煌本『藥師經疏』の撰者とみられる慧觀を眞諦系統の學者と推定された。

ところで、その後田中良昭氏が「僞作の法句經と疏の異本について」（『印佛研』23-1、1974→『田中敦煌』）と題する論文を發表したのである。この論文において田中氏は、敦煌文獻及び目録類の調査結果として、本書のテキストについて從來知られた5種のほかにスタイン本の①②⑥の3種、ペリオ本の⑧⑨⑩の3種、北京本の⑪⑫⑭⑮⑯⑰の6種、臺灣の國立中央圖書館所藏本⑳の1種、個人所藏本㉒の1種、計14種にも及ぶ異本を新たに紹介した上で、當時その内容の確認できる唯一のものであったペリオ本の⑧の首題の下に書寫された「德眞寺比丘僧樂眞住」の内題に注目し、この「比丘僧樂眞住」こそが本書の撰者ではないかと推定したのである。當時その存在が知られた本書のテキストの概要については、田中氏による紹介をベースに表記すれば、以下の通りになろう。

寫本	概　　要
①	3紙で首尾を缺き、第四品より第八品中途までの殘卷。
②	1紙で首部を缺き、尾部は未完擱筆。第九品より第一一品中途までの殘卷。

③	10 紙で首部を缺き、第二品末から始まるが、尾部完全で「佛説法句經一卷」の尾題を有し、『大正藏』が甲本として對校に用いたもの。
④	7 紙で首部を缺き、他本の如く分品していないが、第四品中途から始まり、尾部完全で「佛説法句經」の尾題がある。
⑤	10 紙で第 1、2 紙に若干の破損があり、首部を缺いて第三品末から始まるが、尾部完全で「佛説法句經一卷」の尾題がある。
⑥	2 紙であるが、第 1 紙は、大部分が切りとられ、僅かに「寶明菩薩問字品第一」という第一品のタイトルのみが殘され、第 2 紙も尾部斷缺で、第二品中途までで以下を缺く。ただ第一品のタイトルは、他の諸本が「諸菩薩融心覺序品第一」というのとは異なり、『法句經疏』である P2192 と共に獨特のものである。
⑧	9 紙であるが、第 1 紙は他紙と異なる黄色良質の表紙で、本文は第 2 紙より始まる。首尾完全である。しかもこれは「法句經」の首題、「法句經一卷」の尾題を有するほか、他に全く類例を見ない内題と歸敬偈を有する點で、特に貴重なものである。
⑨	縱 7cm、横 29.5cm の黄褐色厚手の貝葉式梵筴本で、7 紙 13 頁に各 7 行ずつ（13 頁は 3 行）が本書、8 紙と 9 紙の 4 頁に各 6 行ずつが北宗禪系の『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』の異本である『頓悟眞宗要決』が横書きされている。本書は首部を缺き、第四品中途より始まり、尾部完全で「法句經一卷」の尾題がある。
⑩	縱 21cm、横 5cm の折本で、1 頁に各 4 行ずつ書寫されている。まず 2 頁に「觀世音經」のタイトルのみ、3 頁から 18 頁までが義淨譯とされた『佛説無常經亦名三啓經』があり、油紙 2 頁を挾み、19 頁から 26 頁の 8 頁が『法句經』の第一、二品、27 頁から 32 頁までの 6 頁が第一二品末から末尾までで、その間に第三品から第一二品の中途までを缺いている。從って首部はあるが、中間を缺いたもので、「佛説法句經」の首題と「佛説法句經一卷」の尾題がある。更に 34、35 頁と紙背 9 頁に亙って『佛説八陽神呪經』があり、これらは共に『大正藏』卷 85 に收める僞作經典類であり、折本の形式も 9 世紀以後のものといわれている。
⑪	1 紙で第五品より第六品尾部中途までの斷片。
⑫	2 紙で第二品中途より第四品後半中途までの斷片。
⑬	1 紙で⑮に續き、第一三品より末尾までの斷片。
⑭	1 紙で⑰に續き、第九品尾部中途より第一一品中途までの斷片。
⑮	1 紙で⑭に續き、第一一品中途より第一二品末尾までの斷片。
⑯	1 紙で第八品中途より尾部中途までの斷片。
⑰	1 紙で⑯に續き、第八品尾部中途より第九品尾部中途までの斷片。
⑳	4 紙で首尾を缺き、第四品の中途までの斷片。
㉑	⑥と共に首尾完全なもので、『大正藏』の底本とされたもの。
㉒	『敦煌遺書總目索引』の「李氏鑒藏燉煌寫本目録」の 0447 に記載されたもの。「尾全」とあるから尾部完全のものであろうが、ただその存在のみが知られるに過ぎないものである。

特に當時新たに發見された北京本の 7 種について田中氏は、いずれも 1 紙乃至 2 紙の斷片であり、⑪⑫の 2 種を除くほかの 5 種、すなわち⑬⑭⑮⑯⑰は、元來 1 本であったものが 5 つの部分に分斷され、各々別の番號が附されたものであると指摘したのである。

また、岡部和雄氏が『敦煌佛典と禪』において「『法句經』」という章節をたて、また「僞作『法句經』研究の現段階」（古田紹欽博士古稀記念會編『佛教の歴史的展開に見る諸形態 古田紹欽博士古稀記念論集』, 創文社, 1981）と題する論文をそれぞれ發表された。これらの論文において岡部氏は、本書に關する矢吹、水野、宇井、田中の諸氏らによる從來の研究成果を回顧しつつ、本書を引用した非禪宗系の文獻を中心に考察された。特に從來指摘された敦煌本慧觀撰『藥師經疏』、敦煌本『維摩經疏』に加えて、その引用が新たに知られた道綽の『安樂集』卷下の 3 種と本書の對應する内容を掲げて詳しく論じられたのである。とりわけ、道綽の『安樂集』はその成立が 609～645 年の間とされていることからして、本書の成立がこれ以前に遡ることになり、從ってその下限を見定める上で重要であるとしつつ、本書は 7 世紀前半、すなわち隋末から唐初にかけて僞作されたと考えて大過ないであろうと推定された。また、本書を引用した佛教文獻として、新たに敦煌本『金剛經疏』、法藏（643～712）の晩年の撰述とされる『妄盡還源觀』、澄觀の『華嚴經隨疏演義鈔』、法雲が南宋の紹興 13 年（1143）に編述した『飜譯名義集』などを擧げられた。

ところで、木村清孝氏が「僞經『佛説法句經』再考」（『佛教學』25、1988 →同氏『東アジア佛教思想の基礎構造』春秋社、2001）と題する論文を發表された。木村氏は、田中氏が紹介した本書テキストの⑬㉑㉓の 3 種を當時實見できなかったとして除いた各種に、『法句經疏』のテキスト 3 種を加えて、「經題と卷數」、「現存諸本の系統分類」、「引用の檢討」という 3 項目を立て、本書の諸寫本を形態等によって分類し、本書自體の變化を問題にされたのである。檢討の結果として、木村氏は次の 5 項目を擧げられた。

「(1) 本經は初め二卷本として成立したが、かなり早い時期に何らかの事情で上卷は失われ、下卷のみが傳えられた。その下卷は、一卷本としての體裁を徐々に整え、これが流布した。

(2) 本經は六世紀末から七世紀前半までの間、遲くとも六三〇年代には成立していた。

(3) 本經が全面的に受容されたのは敦煌佛教界であり、本經は敦煌佛教の

性格をよく反映している。あるいは本經を生み出したのも、敦煌かもしれない。

(4) 本經は、「純一大乘」の理想を掲げ、空思想と如來藏思想の統合を試み、さとりへの道を開示するなど、やや粗雜ではあるが、スケールの大きな獨自の佛教思想を展開する。しかしそれは、少なくとも八世紀頃までの中國本土には、おおむね「森羅及萬象、一法之所印」などの數句を通じて斷片的、ないし部分的に受容されただけであった。だが、やがて宗密や延壽に代表される、禪を基盤とする總合佛教に融け込み、中國佛教教學の單純化が進むとともに、特定の數句はより重要性を増しながら生きつづけた。

(5) 本經は獨立した經典としては朝鮮・日本に廣まった形蹟がない。これは、本經が早くから僞經の烙印を押されたこと、および、前記の本經の特質が風土的になじまなかったことによろう。」

その後、沖本克己氏が「MENSURA ZOILI—禪文獻の計量語彙論的研究の試み」(『禪文研紀要』19, 1993) と題する論文を發表し、本書を含む禪宗系僞經を主な對象に語彙の定量的研究という獨特の手法を用いてテキストの相關關係について考察されたのである。すなわち、沖本氏は、禪宗系僞經として『法王經』、『金剛三昧經』、『禪門經』、『梵網經』、『法句經』、『佛頂經』、『圓覺經』の7種に、禪宗僞經の成立にも深く關與していると思われる眞諦譯『起信論』、求那跋陀羅譯『楞伽經』の2種を加えて資料とし、比較の爲に玄奘譯『倶舍論』と小乘『涅槃經』を用いつつ、これらのテキストの相關關係を計量的に見通す何らかの方法を模索し、さらにそれを一般論化することの可能性を確かめられたのである。本書に關わる結論として、沖本氏は以下の2點を指摘されている。

「『起信論』は他のテキストとの共通性が高く、その普遍的性格を示すごとくであるが、『法王經』と『法句經』に對しては語彙の相違が大きい。この傾向は『楞伽經』『佛頂經』などにも見られ、『法王經』と『法句經』が特異なポジションにあることを豫想させる。」

「『楞伽經』はほぼ完璧に『金剛三昧經』、『法王經』、『法句經』を包含しているといってよい。」

一方、本書の研究において最も多くの成果を擧げられたのが伊吹敦氏である。すなわち、本書及び『法句經疏』について伊吹氏は、「『法句經』の成立と變化について」(『佛教學』44, 2002) と題する論文の發表を皮切りに、「北宗禪系の

「法句經疏」について」（『東洋學研究』39, 2002 →「關於禪宗系的『法句經疏』」『戒幢佛學』2, 岳麓書社, 2002 中國語譯）、「『法句經』の諸本について」（田中良昭博士古稀記念論集集刊行會編『禪學研究の諸相 田中良昭博士古稀記念論集』大東出版社, 2003）、「『法句經』の思想と歴史的意義」（『東洋學論叢』57, 2004）とそれぞれ題する一連の論文を矢繼ぎ早に發表されたのである。

まず、「『法句經』の成立と變化について」（『佛教學』44, 2002）と題する論文において伊吹氏は、「『法句經』の形態の變化」、「現行本の冒頭部の檢討」、「『法句經』の變化と成立時期」、「『法句經』を生み出したもの」というように項目を立てて本書の成立と變化について考察しつつ、「禪宗と『法句經』との關係は、禪宗と『心王經』との關係と全く同じである」と推定した上で、次の諸點の見解を示されたのである。

「1.『法句經』の成立は、恐らく、禪宗が形成される以前の 6 世紀中葉にまで遡ると考えることができる。

2.『法句經』を生み出したのは北方系の人々であり、それが 6 世紀の北地における思想的課題を擔う形で登場したがゆえに、同じ思想基盤に源を發する、攝論宗、禪宗、華嚴宗、淨土教などの諸宗によって廣く受け入れられることとなった。

3.『法句經』は、上卷を缺くという不完全な形で傳承されていたにも拘わらず、それが廣く受け入れられたため、流布の便宜を圖って、冒頭に新たに文章を附加して一卷本の形態に改める工夫がなされた。

4. 一卷本の『法句經』が廣く流布するうちに、分品を行うテキストが現れ、更にそれに手を加えるテキストが現れるなど、形態上、様々なヴァリェーションが生じた。」

そして、「『法句經』の諸本について」（田中良昭博士古稀記念論集集刊行會編『禪學研究の諸相 田中良昭博士古稀記念論集』大東出版社, 2003）と題する論文において伊吹氏は、本書のテキストについてスタイン本①②③④⑤⑥の 6 種、ペリオ本⑧⑨⑩の 3 種、北京本⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰の 7 種、臺灣本⑳の 1 種、個人舊藏㉑㉒の 2 種の計 19 種を紹介して、45 箇所にわたって内容を比較した結果として、最終的には下記の通り A ～ F 本までの 6 種に纏めることが可能であると推定された。

A 本＝ S3968

B 本＝中村不折舊藏本（大正藏本）、S33+ 爲 45+ 爲 46+ 露 21+ 露 24+ 露 17、

P3924

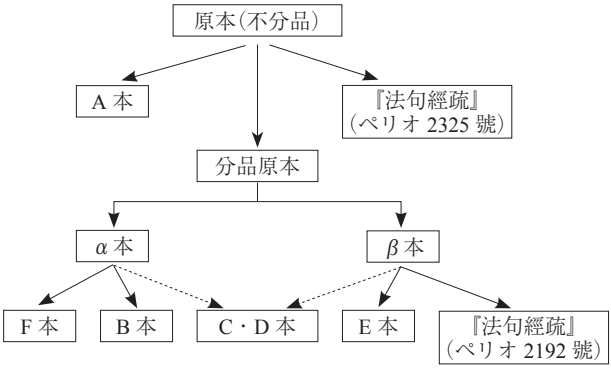
C 本＝臺灣 119 丙（C-1）、騰 23（C-2）、（歳 80?）

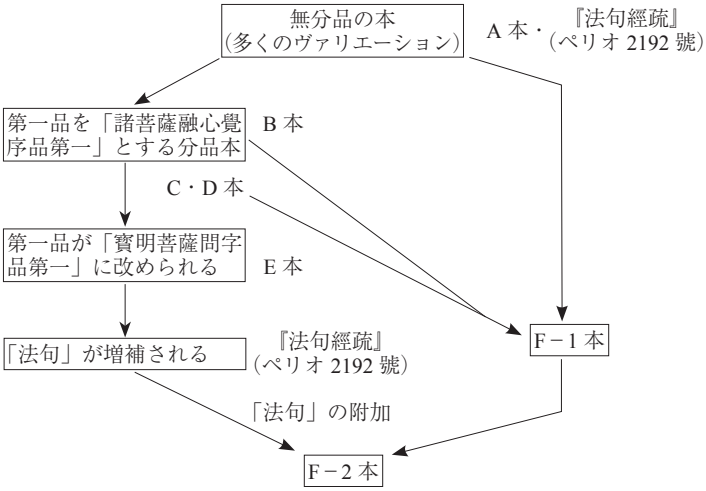
D 本＝ S4106、（歳 80?）

E 本＝ S4666 ＋ S2021、S837

F 本＝ S3922（F-1）、P2308（F-2）

更に、この 6 種のテキストを、他の文獻の引用と現存寫本との關係や分品の有無・品題の相違と諸本の關係などの角度から檢討を加え、以下の 2 つの圖式で本書諸本の成立を分析されている。





また、「『法句經』の思想と歴史的意義」（『東洋學論叢』57、2004）と題する論文において伊吹氏は、「『法句經』の構成と思想について」、「『法句經』の成立について」、「『法句經』が佛教界に與えた影響」、「『法句經』の歴史的意義」というように項目を立て順次に檢討した結果、以下の諸點を明らかにすることができたとされたのである。すなわち、

「1.『法句經』の内容は、空觀の實踐と、それを指導する「善知識」の意義の強調、その實踐によって至りうる境地の説明を中心に構成されており、南北朝期の後半に北地の傳統を受け繼ぐ習禪者によって、彼らの價値觀を代辯するものとして制作された。

2. 當時は、三論宗、天台宗、華嚴宗、淨土教、禪宗といった、いわゆる「中國佛教の諸宗」が形成される時期に當っており、中國人の感性に合う形で體系化された佛教思想と實踐が次第に注目を集めつつあった。そうした中で、すでに理念的な存在であった「佛」よりも、實際の指導者である中國人僧侶を重んじる傾向を生じ、『法句經』に盛られた「善知識」重視の思想は、習禪者に限らず、また、立場の相違をも超えて、廣く注目されるようになった。

3. 新たに形成された「諸宗」の中で禪觀を實踐の中心に措えた人々の代表は禪宗であった。彼らは空觀などの修行に勵むとともに、それによって究極の「覺り」を實現できると主張したのである。そのため、空觀による「悟り」の境地を表現した『法句經』の名句のいくつかは、禪宗系の人々によって取り上げられて、自らの思想を代辯するものとして利用されることとなった。

4. 禪宗系の人々によって重んじられたそれらの名句は、一方では、習禪から出發しつつも次第に「悟り」の世界を哲學的に表現することを目指すようになった華嚴宗の人々にも注目されるようになり、やはり、自説の根據として依用されるようになった。」

ところで、本書の新出のテキストとして、スタイン本の⑦、北京大學所藏の⑱、天津圖書館所藏の⑲、出口氏舊藏の㉓の計4種の存在が新たに知られるにいたった。すなわち、⑦は『方・英藏目録』、⑱は『北大敦煌』第2卷（1995）、⑲は天津圖書館歴史文獻部編になる「天津圖書館藏敦煌遺書目録」（『敦煌吐魯番研究』8、中華書局、2005）などによってそれぞれその詳細が明らかにされたのである。まず、⑦については、『方・英藏目録』によれば、21cm×25.8cm

の 1 紙の斷片で、1 行 17 字で 11 行があり、内容的には T85-1433b5～b15 に相當するという。そして⑱については、『北大敦煌』第 2 巻の巻末に附された張玉範、李明權の兩氏による「敍録」によれば、27.4cm×49.5cm の黄麻紙 10 紙からなる完本で、トータルして 27.4cm×462cm になり、1 紙が 1 行凡そ 17 字で 28 行あり、トータルして 265 行があり、首尾題ともに「佛説法句經」とあるが、品名はなく、内容的には T85-1432b～1435c に相當するという。また⑲については、前掲の「天津圖書館藏敦煌遺書目録」によれば、29.1cm×26.4cm の 1 紙からなり、首尾ともに缺く卷子本の殘卷で、1 行 17 字でおよそ 17 行の内容が殘されており、内容的には T85-1434b17～c7 に相當するという。さらに㉓については、藤枝晃氏の編著になる『トルファン出土佛典の研究―高昌殘影釋録』（法藏館, 2005）によれば、元四天王寺管長の出口常順氏が 1932～33 年頃、ベルリンに滞在中、舊藏家のラフマティ氏（Rachmati）より買い取ったトルファン出土佛典斷片の 1 種で、13.4cm×20.1cm の紅褐色の 1 紙の斷片に、24～26 字詰でおよそ 13 行の内容が殘されており、内容的には T85-1432c20～1433a9 に相當するという。

一方、數多く存在する本書のテキストの中で最も早くテキスト校訂に用いられたにもかかわらず、その後長い間所在不明とされた中村不折氏舊藏本㉑についても、『不折舊藏』（上中下の 3 卷、2005）の刊行によってようやくその中身が知られるにいたったのである。現在では臺東區立書道博物館の所藏となった㉑については、『不折舊藏』によれば、249mm×4849mm からなる完本で、首題は「佛説法句經諸菩薩融新覺序品第一」で、尾題は「佛説法句經一卷」とあるという。

また本書のテキストをめぐる最新の研究成果として、曹凌氏の編著になる『中國佛教疑僞經綜録』（上海古籍出版社, 2011）の「150 法句經」と題する項目がある。曹氏は本書のテキストとして計 25 種を提示しつつ 3 種類に分類された。それらを整理すれば、以下の圖式になろう。なお〇數字は本項で用いたものである。

- 第 1 類
  - 北大 D103（⑱）：完本、首題「佛説法句經」、尾題「佛説法句經」
  - S3968（④）：首缺尾全、尾題「佛説法句經」
- 第 2 類
  - P2308（⑧）：完本、首題「法句經　德眞寺比丘僧樂眞注」、尾題「法句經一卷」
  - 書道博物館本 90（㉑）：完本、首題「佛説法句經諸菩薩融新覺序品第一」、尾題「佛説法句經一卷」
  - S33（①）+BD3645（⑯）+BD3646（⑰）+BD3421（⑭）+BD3423：連結して首缺尾全のテキストとして復元可能。尾題「佛説法句經一卷」
  - BD2580（⑪）：首尾ともに缺。
  - BD3123（⑫）：首尾ともに缺。
  - BD3424（⑮）：首尾ともに缺。
  - P3922（⑨）：首缺尾全、尾題「法句經一卷」
  - P3924（⑩）：中間部分を缺く。首題「佛説法句經諸菩薩融新覺序品第一」、尾題「佛説法句經一卷」
  - S837（②）：首尾ともに缺。
  - S2021（③）：首缺尾全。
  - S4106（⑤）：首缺尾全。尾題「佛説法句經一卷」
  - S4666（⑥）：首尾ともに缺。
  - 臺灣國立中央圖書館本 119 丙（⑳）：首尾ともに缺。
- 状況未詳
  - S7614（⑦）
  - S8495
  - S12213
  - 津圖 67（⑲）
  - 出口氏藏吐魯番文書 234（㉓）

上記の如く、曹氏は本書のテキストを 3 種類に分類したのである。第 2 類のうち、①＋⑯＋⑰＋⑭＋BD3423 という順序で連結可能だと曹氏は指摘したが、筆者が精査したところ、BD3423 は『法華經』の一部を書寫したもので、本書とは無關係のものであることが判明したのである。また、曹氏が状況未詳として擧げられた S7614（⑦）、S8495、S12213、津圖 67（⑲）、出口氏藏吐魯番文書 234（㉓）の 5 種のうち、關聯する目録などによって筆者が確認できた 3 種

には〇數字を附したが、殘りの 2 種については、未確認のため、文獻番號のみ記しておくことにした。

〔法句經注釋書類〕

12、法句經疏（擬）

禪宗系：① P2192　②杏雨書屋藏本 285　③杏雨書屋藏本 736

攝論系：Ⓐ S6220　Ⓑ P2325

〔テキストの飜刻・校定〕

Ⓑ『大正藏』85（1435c-1445a）―㊦

〔和譯〕

㊦宇井伯壽「佛説法句經竝びに疏」（同氏『西域佛典の研究―敦煌逸書簡譯』岩波書店, 1969, pp.353-385）

〔著書・論文〕

矢吹慶輝「一五　法句經疏」（『鳴沙餘韻解説』pp.244-249）

水野弘元「僞作の法句經について」（『駒大佛教紀要』19, 1961, pp.11-33）

田中良昭「僞作の法句經と疏の異本について」（『印佛研』23-1, 1974, pp.122-129）→『田中敦煌』（pp.401-412）

岡部和雄「『法句經疏』」（『敦煌佛典と禪』pp.340-342）

伊吹敦「北宗禪の新資料―金剛藏菩薩撰とされる「觀世音經讃」と「金剛般若經註」について―」（『禪文研紀要』17, 1991, pp.183-212）

伊吹敦「北宗禪系の「法句經疏」について」（『東洋學研究』39, 2002, pp.075-099）→同氏「關於禪宗系的『法句經疏』」（『戒幢佛學』2, 岳麓書社, 2002, pp.189-199）（中國語譯）

伊吹敦「『法句經』の成立と變化について」（『佛教學』44, 2002, pp.1-27）

伊吹敦「『法句經』の思想と歴史的意義」（『東洋學論叢』57, 2004, pp.1-65）

〔略記〕

本書は前項の僞經『法句經』の注釋書であり、それと同様に敦煌文獻にのみ存する貴重なものである。しかも『法句經疏』と稱されているものには、目下

2 通りの寫本があり、それぞれ 2 つの系統に分類されている。ここにいう 2 つの系統とは、すなわち禪宗系と攝論系のことである。本來ならば、敦煌禪宗文獻目録の作成を目指す本稿において、禪宗系のもののみを取り扱うべきであろうが、從來いずれも同名の注釋書として、その對象となる僞經『法句經』と一緒に論じられてきた經緯を踏まえて、禪宗系のものには〇番號を附し、攝論系のものは敦煌文獻の番號を用いることにして、〔著書・論文〕においては、筆者の裁量で『法句經』或いは攝論系のものに關する研究成果の一部をも入れることにした。

前項で述べたように、敦煌文獻より最初に僞經『法句經』とその注釋書である『法句經疏』を發見したのが矢吹慶輝氏である。すなわち、矢吹氏は『法句經』のテキストを大正藏 85 卷の古逸部に收める一方、その注釋書として P2325 の存在を明らかにし、そのテキストを同じく大正藏 85 卷に收めたのである。そしてその解題を「一五　法句經疏」と題して『鳴沙餘韻解説』に收められた。

ところで、僞經『法句經』並びに本書を對象に初めて本格的な研究をされたのが水野弘元氏である。すなわち、水野氏は「僞作の法句經について」（『駒大佛教紀要』19、1961）と題する論文を發表し、『法句經』は僞經であることを論證した上で、それが多くの禪宗文獻に引用されたことを實例を擧げつつ檢討し、その注釋書である P2325 については、玄奘の新譯語、禪宗關係の思想や用語などが全く見られず、眞諦譯の依他性、分別性などの語が用いられているとして、玄奘譯以前もしくは玄奘譯が一般に依用される以前（恐らく 7 世紀中頃までの間）に、攝論宗に關係のある人が著したものではないか、と推定されたのである。

一方、1969 年に岩波書店より刊行された宇井伯壽氏の『西域佛典の研究―敦煌逸書簡譯』には、「佛説法句經竝びに疏」と題する章節があり、『法句經』及びその注釋書である P2325 の解説と大正藏本による和譯が收録されている。この解説において宇井氏は、『法句經』およびその注釋書である P2325 について、「全體は禪宗的の色彩が濃いやうに思はれる。然し、疏は却って禪宗的ではなくして、一般の教家の注釋の仕方で注釋せられ、禪宗的表現はあまりない如くである」と指摘されたのである。

その後、田中良昭氏が「僞作の法句經と疏の異本について」（『印佛研』23-1、1974 →『田中敦煌』）と題する論文を發表した。この論文において田中氏は、

從來水野氏が攝論系のものと推定された『法句經』の注釋書であるP2325の異本としてS6220を新たに紹介した上で、この兩者とは全く別系統と思われる本書のテキスト、ペリオ本①の存在にも注目した。田中氏によれば、P2325は『法句經』の3倍弱の長さを有し、23紙からなる完本であるのに對して、同系統のS6220は僅かに1紙17行で、首部にある經題釋の部分に相當する1斷片にすぎないという。さらに、新たに紹介された①については、56紙、1533行にわたる長篇のもので、最初の2紙に破損があるために首題は不明であるが、「佛説法句經一卷」という尾題を有している。しかも①は、P2325の『法句經疏』が本文中には品名を擧げないで、序分、正宗分、流通分という三分科法を用いて注釋したのに對して、14品各品の品名を擧げ、各品ごとに注釋している點に特色があるという。また、田中氏は、P2325には20數回の經論の引用があるのに對して、①には60數回にも及ぶ經論の引用があり、その内經論名を擧げてのものは僅か14回にすぎないとした上で、達摩の『二入四行論』と密接なものがあり、また『大唐内典録』（664）に初出する唐初成立の僞經『究竟大悲經』からの引用もあることを明らかにし、①の第11品にある三性説には依他性、眞實性という眞諦譯に、遍計性という玄奘譯を併用することを突き止めたのである。從って本書の成立時期については、田中氏は「六五〇年をそれ程遡らない頃の成立とされる僞作の『法句經』、更にはそれと同時期の成立といわれる『究竟大悲經』以後の成立であることはもちろんであるが、前記用語上の變化からして、眞諦譯から玄奘譯が用いられる過渡期、即ち七世紀後半の成立になるものと考えられ、從來知られた『法句經疏』より以後のものであることが明らかとなったのである」と指摘した。

田中氏の研究成果を踏まえつつ、伊吹敦氏が「北宗禪系の「法句經疏」について」（『東洋學研究』39、2002）と題する論文を發表された。この論文において伊吹氏は、「北宗文獻としての『法句經疏』」、「北宗註釋文獻と『法句經疏』」、「金剛藏菩薩註の引用と『法句經疏』の成立時期」、「北宗文獻としての『注觀世音經』」というように項目を立てて檢證した結果、本書のテキスト①について以下の諸點を明らかにすることができたという。

「1. 引用文獻や註釋内容から判斷すれば、かつて數多く著されたであろう北宗禪の註釋文獻の一つと認められる。

2. 多數の文獻が引用されるが、その中には『法性論』や『巧拙論』、『究竟經』のような散佚した文獻が含まれており、その資料價値は極めて高い。

3. 註釋において『觀世音經讃』が引用されている箇所が存在するが、これは現存する文獻のなかで『金剛藏菩薩註』に言及した唯一の例といえ、その流布を考える上で極めて重要である。

4. 註釋の特徴として、しばしば「内外兩釋」という形式を採っているということが擧げられるが、これは、「金剛藏菩薩註」に見られた「心觀釋」「名字釋」による註釋の發展と見做しうる。

5. その成立は、『觀世音經讃』を依用している點から見て、八世紀中葉以降と見るべきであり、内容や禪宗における『法句經』の受容状況などから見ても、それは支持される。

そして更に、これと關聯して、次のことがらも明らかになった。

6.『法句經疏』の「内外兩釋」という形式を全編に亙って採用した註釋書として愚道撰の『注觀世音經』があるが、これも内容から見て北宗の註釋文獻の一つと考えることができ、また、その形式が『法句經疏』の發展と考えられることから、八世紀後半以降の成立と見做すことができる。」

ちなみに、ここでいう「金剛藏菩薩註」とは、やはり伊吹氏の「北宗禪の新資料―金剛藏菩薩撰とされる「觀世音經讃」と「金剛般若經註」について―」（『禪文研紀要』17、1991）と題する論文によって知られた金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讃』と『金剛般若經註』の2種の北宗禪文獻のことである。この2種の禪宗文獻については、すでに本目録シリーズのⅢ注抄・僞經論類（1）においてそれぞれ項目を立てて紹介しており、詳細はそれに譲りたい。なお、この2種のうち、伊吹氏によれば、本書と密接な關聯を有しているのが『觀世音經讃』であるという。

ところで、本書のテキストの杏雨書屋藏本②、③については、2013年3月をもってようやく全シリーズの刊行が終了した『敦煌秘笈』第4册、第9册によってその影印が公開され、その存在が知られるにいたった。それぞれに附された説明によれば、②は、縱28.5cm×横1656.5cmの39紙（1紙は縱28.5cm×横43.5cmで、30字×30行）からなる首缺の卷子本であるのに対し、③は、縱27.9cm×横127.2cmの3紙（1紙は27.9cm×42.6cm、26字×30行）からなる首尾ともに缺く卷子本であるという。筆者が影印によってこれらの2種の内容を確認したところ、いずれも本書のテキストであることが判明したのである。長い間、本書のテキストとして知られていたのがペリオ本の①のみであるだけに、杏雨書屋藏本の②と③の2種の出現は、大きな意味をもつ。すなわち、こ

れらの出現によって①との校合が初めて可能となることから、本書のテキストの作成に當たり、いずれも缺かすことのできない貴重なものであるといえよう。

13、金剛三昧經

① S2368V　② S2445　③ S2610　④ S2794　⑤ S3615　⑦ S8246　⑧ BD593（荒 93、北 6282）　⑨ BD4281（玉 81、北 6283）　⑩杏雨書屋藏本 147（李氏鑒氏舊藏本 315）

〔テキストの飜刻・校訂〕

敦煌本以外のテキストによるもの

【宋】【元】【明】【宮】『大正藏』9（365c-374b）

〔英譯〕

Robert E.Buswell: THE FORMATION OF CH'AN AND IDEOLOGY IN CHINA AND KOREA: The Vajra-samādhi-Sūtra, a Buddhist Apocryphon (Princeton University Press, 1989, pp.183-251)

〔著書・論文〕

小野玄妙「元曉の金剛三昧經論」（『新佛教』11-6, 1911）

鈴木大拙「達摩とその思想的背景」（『鈴木禪思想史』2, pp.15-107）→〈大拙〉2（pp.15-107）

宇井伯壽「達摩と慧可ならびにその弟子」（『宇井禪宗史』pp.1-90）

水野弘元「菩提達摩の二入四行説と金剛三昧經」（『印佛研』3-2, 1955, pp. 239-244）

水野弘元「菩提達摩の二入四行説と金剛三昧經」（『駒大佛教紀要』13, 1955, pp.33-57）

木村宣彰「金剛三昧經の眞僞問題」（『佛教史學』18-2, 1976, pp.106-117）

岡部和雄「『金剛三昧經』」（『敦煌佛典と禪』pp.360-362）

李箕永「원효성사의 길을 따라서—金剛三昧經의 經宗에 대한 그의 考察을 중심으로—（元曉聖師の道をたどって—金剛三昧經の經宗に對する考察を中心として—）」（『釋林』16, 1982, pp.1013-1024）→『元曉思想研究 I』（1994, pp.69-80）

金煐泰「新羅에서 이룩된 金剛三昧經—그 成立史的 검토—（新羅にて作られ

た金剛三昧經―その成立史的檢討―）」（『佛教學報』25, 1988, pp.11-37）
Robert E.Buswell: THE FORMATION OF CH'AN AND IDEOLOGY IN CHINA AND KOREA: The Vajra-samādhi-Sūtra, a Buddhist Apocryphon (Princeton University Press, 1989, pp.3-181)
柳田聖山「金剛三昧經の研究―中國佛教における頓悟思想のテキスト―」（韓國・『白蓮佛教論集』3, 1993, pp.433-460）
沖本克己「MENSURA ZOILI―禪文獻の計量語彙論的研究の試み」（『禪文研紀要』19, 1993, pp.077-096）
韓泰植（普光）「韓半島で作られた疑僞經について」（『印佛研』45-1, 1996, pp.201-209）
石井公成「『金剛三昧經』の成立事情」（『印佛研』46-2, 1998, pp.31-36）
伊吹敦「元曉と『金剛三昧經』」（『元曉學研究』11, 2006, pp.25-56）
石吉岩「『金剛三昧經』의 성립과 유통에 대한 재고（『金剛三昧經』の成立と流通に關する再考）」（『普照思想』31, 2009, pp.77-126）
石吉岩「『金剛三昧經』と三階教」（『印佛研』58-2, 2010, pp.054-057）
洪在成（法空）「『金剛三昧經』と三階教」（『印佛研』58-2, 2010, pp.047-053）
于德隆「《金剛三昧經》眞僞考」（『圓光學報』20, 2012, pp.137-192）

〔略記〕

本書は、古來歷代經録によってその名が知られており、また「一味眞實無相無生決定實際本覺利行」を説くものとして『大正藏』卷 9「法華部」に入れられたものである。經録では本書を「北涼失譯」とする一方、九識説を説く内容が新しすぎたせいか、新羅の元曉が『金剛三昧經論』を著すまで、ほとんど言及されてこなかった。

近代における本書の研究に先鞭をつけたのが鈴木大拙氏である。すなわち、鈴木氏が「達摩とその思想的背景」（『鈴木禪思想史』2 →〈大拙〉2）と題する論文を發表し、達摩の二入説が本書に基づくものであると指摘された。そして、宇井伯壽氏はその著である『宇井禪宗史』の一節として「達摩と慧可ならびにその弟子」と題する章節を設け、達摩の二入四行説と酷似する内容が本書にもあることに注目し、「理入と行入の名は、元來金剛三昧經入實際品第五に見出されるものであって、恐らく達摩は、此經から此名を採用したのであらう。･･･（中略）･･･ 達摩の二入四行の説が、金剛三昧經に基くものなることは疑

ないといへる」といい、二入四行説が本書の入實際品の内容によって組織されたものであるとする見解を示されたのである。

ところが、水野弘元氏が「菩提達摩の二入四行説と金剛三昧經」（『駒大佛教紀要』13、1955、『印佛研』3-2, 1955）と題する同名の論文2篇を立て續けに發表し、鈴木・宇井説に異議を唱えられたのである。すなわち水野氏は、本書の最後の部分にある「是經名者、同攝大乘經」という表現に注目し、「本書が諸經の要を集めた攝大乘經であり、この經のみで大乘の諸經説の全貌を知らしめようと意圖したものであることが知られる」とした上で、二入説が本書の入實際品から採ったとする鈴木・宇井説に對し、實はその逆で、本書が達摩の二入説を採り入れたものであるとしつつ、本書が648～665年の間に出現した僞經であると推定されたのである。

水野氏の研究成果を受けて、木村宣彰氏が「金剛三昧經の眞僞問題」（『佛教史學』18-2、1976）と題する論文を發表された。すなわち木村氏は、玄奘の法相唯識の勢力に押されて衰微した眞諦攝論宗の繼承者たちが、主要學説である阿摩羅識を再び佛説として根據付けることによって攝論學派の存續發展をはかろうとして本書を僞作したと指摘した上で、その作者を新羅の大安や元曉の周邊の人々としつつ、その成立を、玄奘が『般若心經』を譯出した649年から元曉の『金剛三昧經論』が成立したとみられる675年の間と推定されたのである。なお、本書を僞作と判斷した理由として、木村氏は以下の4點を擧げている。

1、先ず、虚空・金剛・般若の3つを三解脱としたり、信・思・修・行・捨を佛教の五位説として立てたりするように、法相、名數等を解せざるが如き用語のあること。

2、またこの經の中には、初期大乘經典の般若經や法華經と同時に、中期經典の涅槃經や後期經典の楞伽經等の諸經を代表する思想が經典の發展的段階を無視した形で統合されているという、インド製の經典としては考えられないこと。

3、對告衆として心王菩薩、樹提長者、阿伽陀比丘など一般の飜譯經典にはあまり見られない名の人物が雜然と登場すること。

4、またこの經に用いられる譬喩はいずれも簡單なもので創造的ではなく、既存の經典のそれを充分に知っていて要約したもののようであり、この經の獨自なものはほとんど認められないこと。

上述の水野、木村の兩氏による本書の研究は、文獻に基づくものであったが、こうした研究傾向を變えたのが、Robert E. Buswell氏である。すなわちBuswell氏

は、THE FORMATION OF CH’AN IDEOLOGY IN CHINA AND KOREA: The Vajrasamādhi-Sūtra, a Buddhist Apocryphon (Princeton University Press, 1989) と題する著書を出版し、その Part one: Study の中で道信に師事した新羅の法朗が本書の著者であることの可能性が最も高いと推定され、そしてその Part two: Translation において大正藏本に基づいて本書の英譯を試みられたのである。

それに先立ち、金煐泰氏が「新羅에서 이룩된 金剛三昧經―그 成立史的 검토―(新羅にて作られた金剛三昧經―その成立史的檢討―)」(『佛教學報』25,1988）と題する論文において、本書を元曉の指南役であった慧空の著作と推定されたのに對し、柳田聖山氏は「金剛三昧經の研究―中國佛教における頓悟思想のテキスト―」（韓國・『白蓮佛教論集』3、1993）と題する論文を發表し、元曉を本書の作者とし、大安がその經文を抜き出して 8 章の本書を仕立てたのではないかと推論した上で、達摩の二入説によって本書が成立したとする水野説に對し、本書を踏まえて『續高僧傳』の二入説が生まれ、『楞伽師資記』の「略辨大乘入道四行、弟子曇林序」が完成したのであって、敦煌本『二入四行論』は本書によると想定されたのである。また、韓泰植（普光）氏は「韓半島で作られた疑僞經について」（『印佛研』45-1, 1996）と題する論文において、從來の諸學説より一歩前進したものとして前述の柳田説を評價しつつ、大安が本書を作成し、その注釋を元曉に依頼したのではないかと想定されたのである。

これらの研究成果を踏まえて、石井公成氏が「『金剛三昧經』の成立事情」（『印佛研』46-2、1998）と題する論文を發表された。この論文において石井氏は、本書に關する從來の研究成果を丁寧に紹介しつつ、Buswell 氏以降の諸説を「『宋高僧傳』や『三國異事』に見える神秘化の進んだ後代の逸話を主なよりどころとした想像説」と評した上で、本書にみられる守一説を皮切りに考察した結果、「攝大乘經」と稱する本書は、達摩や道信のような禪僧を尊信してその教説を廣めることを目的とした東山法門直系の僞經ではないと指摘された。

一方、沖本克己氏が「MENSURA ZOILI―禪文獻の計量語彙論的研究の試み」（『禪文研紀要』19, 1993）と題する論文を發表し、本書を含む禪宗系僞經を主な對象に語彙の定量的研究という獨特の手法を用いて考察されたのである。すなわち沖本氏は、禪宗系僞經として『法王經』、本書、『禪門經』、『梵網經』、『法句經』、『佛頂經』、『圓覺經』の 7 種に、禪宗僞經の成立にも深く關與していると思われる眞諦譯『起信論』、求那跋陀羅譯『楞伽經』の 2 種を加えて資料とし、比較の爲に玄奘譯『倶舍論』と小乘『涅槃經』を用いつつ、これらの

テキストの相關關係を計量的に見通す何らかの方法を模索し、さらにそれを一般論化することの可能性を確かめられたのである。本書に關わる結論として、沖本氏は以下の 3 點を指摘されている。

「『楞伽經』はほぼ完璧に『金剛三昧經』、『法王經』、『法句經』を包含しているといってよい。」

「『金剛三昧經』は『起信論』に似た數値を示すが、『法王經』に近縁性を示す點が異なる。」

「『法王經』は『金剛三昧經』に似た數値を示す。また兩者の異なり度は低いから、形態的には相似性が高い。」

ところで、前述した金煐泰、韓泰植（普光）の兩氏以外にも、本書の研究に精力的に取り組まれた韓國人研究者がおられた。後述する洪在成（法空）氏が發表した「『金剛三昧經』と三階教」（『印佛研』58-2, 2010）と題する論文によれば、李箕永氏が「원효성사의 길을 따라서―金剛三昧經의 經宗에 대한 그의 考察을 중심으로―（元曉聖師の道をたどって―金剛三昧經の經宗に對する考察を中心として―）」（『釋林』16, 1982）と題する論文において、本書が『金剛三昧經論』と同様に元曉によった可能性を示され、石吉岩氏が「『金剛三昧經』의 성립과 유통에 대한 재고（『金剛三昧經』の成立と流通に關する再考）」（『普照思想』31, 2009）と題する論文において、本書を三階教内部の人物の手によったものとする。そして洪在成（法空）氏自身も前掲の「『金剛三昧經』と三階教」と題する論文において、「當時劃期的であった實踐佛教を代表する三階教の思想を地藏系の流れと關連させ、それと『三昧經』、『三昧經論』との影響の有無を考察してきた。その結果、用語や思想の上で、地藏系經典や『三昧經』、『三昧經論』との密接な關連が十分に確認された。また、當時の中國と新羅を取り卷くすべての時代的状況によって、『三昧經』の譯出が要請されたことが推測される」とした上で、本書の著者を、初唐期に禮懺を民衆に盛んに勸誘した神昉ではないかと想定されたのである。

さらに洪氏の研究成果と時を同じくして、石吉岩氏も「『金剛三昧經』と三階教」（『印佛研』58-2, 2010）と題する論文を發表された。その中で石氏は、前述した「『金剛三昧經』の成立と流通に關する再考」と題する論文で推定された本書の三階教撰述説を補強する新たな證例として、本書にみられる「如來藏海」、「四依僧」という 2 つの概念に注目し、それらがいずれも三階教と深く關連するものであると指摘し、本書を三階教の撰述とする自らの假説を改めて

補強されたのである。

以上の如く、本書に關する研究成果は數多く出現しているが、本書のテキストについては、そのすべてが敦煌本以外の傳世資料によるものであり、敦煌本を用いたテキスト校訂は、今日もなおなされていない。敦煌文獻關連の各種の目録によれば、敦煌本には本書のテキストとして 10 種の存在が知られているのである。